

## 助成年度：平成 12 年度

[所属] 国立民族学博物館 地域研究企画交流センター

[役職] 助教授

[氏名] 阿部 健一 (他計 9 名)

[課題]

### わたしたちの地球：世界子供環境ポスターの語りかけるもの

[内容]

国立民族学博物館の所蔵する、世界こども環境ポスター・コンテスト応募作品（国内約 5 万点、海外約 3 万点）を資料として以下の研究活動を行った。

まず、全ポスターのデジタル化と可能なかぎりデータを添付する作業。データとしては、氏名・国名（地域）・年齢といった基本データ以外に、モチーフやテーマにかかわるキーワードも分析のためのデータとして採用した。すべての資料を整理することはできなかったが、作業はルーチン化し、公開に向けての準備ができる段階になった。

研究会は、3 回行った。子どもの絵をどうみるかが議論されたが、実際に絵を手にしたの、いわば「合評会」といった性格でもある。子どもたちの絵のモチーフやテーマの選択、美術的な傾向の地域差をみるのが目的であったが、実に「楽しく」かつ「考えさせられるもの」であった。意表をつく表現やモチーフの選択、色使いがある。大胆な構図のものもあれば精緻な描きこみある。子どもの絵を見ることの楽しさである。一方、戦争や開発などの大人の愚行を告発するものや暗い色調で環境破壊のすすんだ地球を描くもの。絵を見る「楽しさ」と同時に、絵に触発され「考えさせられること」があった。

「楽しさ」と「考えさせられるもの」をできるだけ多くの人と共有したいと考え、試みたのが「わたしたちがつくる地球環境ポスター展」である。小学生を対象に、世界の環境ポスターの中から自分の好きな絵を選び、それに解説を加え、展示するまでを行ってもらった。最初とまどいのあった子どもたちが、目の前で環境ポスターの包みが開かれ、絵を手にした瞬間、生き生きと目を輝かせ始める。タイトルをつけ、絵のどこに自分が興味を引かれたかを「解説」するのだが、会場が急に沸き立つようであった。「絵の持つ力」を再認識したが、子どもたちこそが絵の訴えかけるものをもっともよく理解している、と思われた。